

# 携帯を利用したコミュニケーションの影響と教育実践への応用\*

## —高校生に対する調査—

木内泰 (学籍番号 200721526)

研究指導教員 葉袋秀樹

副研究指導教員 歳森敦

### 1. はじめに

現在では、高校生の日常生活において携帯電話を用いたコミュニケーションが欠かせないものとなっている<sup>1)2)</sup>。携帯電話は、いつでもどこでも特定の人に連絡がとれるという特性により、日常生活になくてはならないコミュニケーションツールとなった。しかし、この特性により、表面的な人間関係や携帯電話への依存が促進されるという議論<sup>3)</sup>や、携帯メールの使用が盛んなほど関係が密になるといったポジティブな報告<sup>4)5)</sup>もあり、携帯電話を利用したコミュニケーションが友人関係及び精神的健康を計る「社会的適応」に与える影響についての結果はこれまでのところ一貫していない。また、携帯電話を利用したコミュニケーションが一大文化といえるほど利用されているにもかかわらず、使い方や悪影響の予防についての教育実践はほとんど行われていない状況にある。

### 2. 研究目的

こうした状況を踏まえて、本研究では、次の二点を検討することを目的とする。第一の目的として、携帯を利用したコミュニケーションと社会的適応との関係性について調査を行い、先行研究の結果との検討を行う(研究 I)。第二の目的として、研究 I で得られた結果

を踏まえて、携帯を利用したコミュニケーションとネガティブな関係が見られた社会的適応の側面を取り上げ、そのネガティブな影響を予防するための効果的な授業を考案し、その授業の効果についての検討を行う。

### 3. 研究 I

#### 3. 1. 方法

研究 I では、茨城県内の私立高校 1 校の 3 年生 242 名を対象に、「携帯電話のメール・通話の利用」と「社会的適応(親密性、つながりの不安、本音友人との行動、友人関係の満足感)」の関係を検討するための一時点の質問紙調査を行った。

#### 3. 2. 結果・考察

研究 I では、主に以下のような結果が示された。

第一に、「メール数」と「親密性」、「本音友人との行動」に弱い正の相関が見られ、先行研究に見られるポジティブな関係性が支持された。

第二に、メール利用低群において「メール数」と「つながりの不安」、「親密性」の間に弱い正の相関が見られ、部分的に先行研究に見られるネガティブな結果についても支持された。

### 4. 研究 II

#### 4. 1. 方法

研究 II では、研究 I の結果を踏まえ、ネガ

---

\* “The effects of communication by cellular phone on interpersonal relationship and application to educational practice: A survey for high school students” by Hiroshi KIUCHI

ティブな影響をもたらし得る「つながりの不安」に着目し、茨城県内の協力校 3 校 18 クラス(720 名)を実験群(教示のみ, 教示とまとめ), 統制群の 3 つの条件に分け, 「つながりの不安」を低減するための教育実践を行い, 「社会的適応(ケータイ依存, つながりの不安, 依存対処項目, ネガティブな性格)」に関する 3 回の質問紙によりその効果を検討した。

#### 4. 2. 結果・考察

「事前の得点」を共変量, 「実験条件」と「性別」を独立変数, 「事後の得点」を従属変数とする共分散分析を行った結果, 主に以下のような結果が示された。

第一に, つながりの不安を含むケータイ依存についての授業を実施した結果, 実験群において, 授業の直後には, 「依存度」, 「ネガティブな性格」を低減し, 「依存対処項目」を増加する効果が見られた。

第二に, 授業の 1 か月後には, 実験群において, 「依存度」, 「つながりの不安」, 「携帯電話の重要性」, 「ネガティブな性格」を低減する効果が見られた。

第三に, 実験群の「教示とまとめ」を実施した条件において, 主に「依存度」, メール利用低群・つながりの不安の事前得点高群の男子における「つながりの不安」, 「依存対処」を低減する効果が見られた。

第四に, 実験群の「教示とまとめ」を実施した条件において効果が確認された項目が多く, 教示だけでは十分ではなく, まとめまでを含めた授業が効果的であった。

#### 5. 総合考察

研究 I では, 先行研究におけるポジティブな結果に加え, 部分的にネガティブな結果についても支持する結果となった。

研究 II では, 主に実験群の「教示とまとめ」

を実施した条件において, 今回用いた教示がつながりの不安を含むケータイ依存に効果的であった可能性が示唆された。

#### 6. 結論

本研究では, 携帯を利用したコミュニケーションと社会的適応の間に, ポジティブな関係もネガティブな関係の両方が見られた。

また, 本研究で実施した授業は, 携帯電話が「社会的適応」に及ぼすネガティブな影響を低減するのにある程度効果的であったことが示唆された。今後は, より長期的な影響を検討することが望まれる。

#### 7. 参考文献

- 1)内閣府(2002). 第4回情報化社会と青少年に関する調査. 参照日:2008年10月21日, 参照先:
- 2) 村上文洋・前田由美(2006). 暮らし モバイル社会研究所(編) モバイル社会白書 2006, モバイル社会研究所, 58-59
- 3) 千石保(1985). 現代若者論—ポスト・モラトリアムへの模索—. 弘文堂
- 4) 木内泰・鈴木佳苗・大貫和則(2008). ケータイを用いたコミュニケーションが対人関係の親密性に及ぼす影響—高校生に対する調査—. 日本教育工学会論文誌, 32(Suppl.):169-172
- 5) 辻大介・三上俊治(2001). 大学生における携帯メール利用と友人関係—大学生アンケートの調査の結果から—. 第18回情報通信学会大会 2001(平成13)年6月17日 個人研究発表 発表資料, 参照日:2008年10月21日, 参照先:  
[http://www.d-tsuji.com/paper/r02/rsm\\_0106.pdf](http://www.d-tsuji.com/paper/r02/rsm_0106.pdf)